『乱！総選挙2012』の番組制作について

村上信高[†]、安田英史[†]

まえがき

2012年11月16日の衆議院解散を受けて、同年12月16日に第46回衆議院選挙が行われ、即日開票された。

TBSテレビでは、投票終了時刻の3分前である午後7時57分より、翌朝5時までの約9時間の長時間にわたり選挙特番を放送し、刻一刻と変化する開票状況や当選者や選挙関係者の生の声をJNN (TBSテレビをキー局とする全国28社のネットワーク) 系列全社の力を結集し伝え続けた。また、文字情報という形で視聴者の生の意見・コメントを織り込みながら放送するスタイルをとった。

今回の番組制作ファイルでは、選挙特番の中で大きなウェートを占めた現場中継、開票速報CG、文字情報について紹介する。

現場中継について

TBSテレビが担当した関東の政党開票センターや候補者事務所などからの生中継の裏側について紹介する。TBSテレビでは、今回の選挙特番で前回の選挙特番とほぼ同数の21カ所の政党開票センターや候補者事務所から生中継を行った。生中継を行うための技術スタッフは120名弱となった。この他に生中継ではなくENG取材^{*1}した素材を17

カ所から総計38回の伝送を行った。

さて、選挙中継は、通常の中継と下記の点で異なる。

(1) 中継対象および中継現場が変化する

どの候補者を取り上げるかはJNNの票読みに基づき日々変化していき、かつ、候補者がバンザイを事務所以外で行う場合があり、その決定は直前になることが多い。

(2) 数多くの機材、備品が使われる

下見の際に、ケーブル長以外に養生用のゴムマットの量など、当日持参する機材を細かく確認する必要がある。選挙中継は、スポーツや音楽中継に比べると小規模であるが、中継現場の数が非常に多い。このためカメラや中継車など明らかに不足する機材が発生する。また、予備機材も厳選し機材の利用効率を極限まで高める必要がある。今回も固定用重りや台車/ゴムマットまで員数管理し、また、予備機材も近いところは共通予備とするなど機材の調整を行った。

(3) 下見の際に可能な限り多くの伝送方法を検討しておく必要がある

中継現場が多く、かつ変更もあり得るので、FPU伝送^{*2}のチャンネルプランの確定は直前となる。このため、下見の際にはすべてのFPU受信基地局に対し伝送試験を行う必要がある。

(4) 開票当日に中継現場に行くスタッフが下見を行えない場合が多い

通常、下見は当日の担当者が行うが、選挙の場合は中継対象の候補者が流動的であり、かつ下見可能日が限られる

ことが多いために代わりの者が下見を行うことになる。

(5) 中継決定から本番日までの時間が短い

今回は解散から開票まで4週間であった。生中継の場合はスタジオ音声の送り返しや打合せのために、NTTの臨時専用電話回線が必要となるが、この申請メ切りが2週間前までとなる。さらに候補者は関東一円に亘るため下見にも時間が掛かる。また、他局との取り合いになる可能性が高い借用機材の手配も行う必要がある。

(6) 可能な限りFPU伝送にこだわる

TBSテレビは、関東圏にまんべんなくFPU受信基地局を設置している。選挙の場合はほぼ同時刻に非常にたくさんの伝送を成立させなければならないので、送信点受信点の位置関係および偏波面やチャンネルを精査しながら作成するFPUチャンネルプランは、非常に複雑で緻密なものとなる。また、SNG伝送^{*3}は、緊急突発ニュースやFPU伝送が困難な地点での伝送に回せるよう、極力使用しないようにしている。都市部では、ビルの屋上からでも他のビルに遮蔽されFPU伝送が不可能な場合もあるが、中間に受信点を設け2段中継とし、極力FPU伝送を確保している。

TBSテレビでは、このように通常の中継と異なる選挙中継を円滑に行うために、中継TP (Technical Producer) という担当者を決め、中継TPが下見と機材の割り振りを検討するようにしている。下見は一日に3カ所以上回ることもあるため、混乱しないようにメモと写真を取り、帰社後それを資料に

*1 ENG取材：取材映像・音声信号をVTR・メモリーカードなどに記録する手法。

[†] 株式会社東京放送ホールディングス
"Making of "Ran! General Election 2012" from a Technical Point of View" by Nobutaka Murakami and Hidefumi Yasuda (Department of News Engineering & Operation, Division of TV Technology, Tokyo Broadcasting System Holdings Inc., Tokyo)

*2 FPU伝送：ビルの屋上や山上の受信基地局を経由してスタジオまで取材映像・音声信号を無線伝送する手法。

*3 SNG伝送：通信衛星を経由してスタジオまで取材映像・音声信号を伝送する手法。

まとめる。当日の担当者が、この資料だけを基に、中継に必要な機材を集め、中継車の停め位置からFPU伝送のポイントやカメラ位置やケーブルルートが理解できるようにする必要がある。

その他に、選挙中継が通常の中継と異なる点として、他局との調整や共同作業がある。中継対象は各局の判断となるが、それが複数局重なった場合は、円滑に中継を行うために、中継幹事となる局を決め、事務所との折衝やカメラの位置決めや照明の用意などを行う。これは候補者個人のみならず政党についても同様である。政党の開票センターは、各社独自の取材の他に、代表局を決め、その局に代表中継制作と各局への生配信を任せる。このような各局の情報を集約して担当を決めるために、NHKを含む在京キー局では調整会議を3回程度開いて中継幹事を決め、併せて代表中継の各局への配信方法を確認する。特に政党代表中継は、ユニ中継^{*4}を出さない局に対しては唯一の信号であり、かつ、政党幹部のインタビューはこの回線を使用して行われるために、非常に重要度の高い伝送

*4 ユニ中継：代表中継に対する言葉として各社が独自に中継を行うこと。

図1 選挙サーバの仕組み

となる。このため、完全二重化などの対策を施す。

選挙特番当日は、『第32回全日本実業団対抗女子駅伝競走大会(宮城県)』の生放送と重なったため、機材やスタッフの確保に極めて困窮した。特にFPUは借用できないので、駅伝中継で宮城県に出動していたヘリで空輸するという綱渡りの運用を行った。さらにスタッフについても、社内では他部署に異動している中継技術経験者を動員し、全国から中継技術スタッフに駆けつけてもらった。

開票速報CGについて

選挙番組の一つの柱となるのは、開票データを基にした開票速報コーナー

である。ここで言う開票データとは、開票所で得られる得票データだけではなく、当日の出口調査など、選挙に関するデータ全般を指す。

開票データは、選挙番組にとって非常に重要な位置を占めている。大差がついた選挙区は、いち早く当確情報が出るため、中継のスタンバイなども行う必要もあり、競っている選挙区では接戦状況を伝えることが重要となり、刻一刻と変わる開票データを元に、番組が組み立てられていく。

JNN系列では、系列の力を結集し全力でデータの収集を行っており、JNN各局で集められた投票データや出口調査の情報は、TBSに設置されている選挙サーバに集められる(図1)。また、

図2 選挙CGサンプル

この情報は、各局で閲覧できるようになっており、候補者の“当選確実”（以下、当確）の判断や、開票速報CGに利用できるようになっている。

当確情報は、集められたデータを基に、記者が取材した情報など、さまざまな要素を加味して、“出す”/“出さない”の判断が行われる。当確情報は、取り扱いが非常に繊細で間違いが許されないものである。

CGチームは、なるべく最新の情報を伝えるため、刻々と変化するサーバの状況に対応して、ほぼリアルタイムでCGを作成し、必要なタイミングで出せる準備をしている（図2）。

開票データの量は非常に膨大になるが、これをただ単に表示するだけでは、非常にわかりづらくなる。特に、現在の衆議院選挙制度では選挙区と比例重複立候補が可能であり、比例での当落は選挙区の得票が影響するため、視聴者にとっては非常に複雑でありわかりづらい。このため、短い時間で、いかに効果的に情報が伝えられるかを、選挙番組の度に研究し、わかりやすい画面づくりに努めている。

文字情報について

視聴者の生の声や現場に展開している記者や放送では紹介できないような細かい情報なども逃さず伝えるために、“文字情報”と称して画面の左上に、可能な限り多くの情報を送出してきた。

今回の文字情報は、最近では当たり前前となっているTwitterとの連動だけではなく、JNN各局の記者が独自に収集した情報やFacebookのTBSのページから収集した情報、メールで投稿される視聴者の意見などをバランス良く取り入れて内容を構成した（図3）。

また、26時半～29時（午前2時半～5時）の時間帯では、番組内容もSNS連携を意識した構成をとり、Twitterなどを通じて活発な意見が寄せられた。今回の文字情報は、地上波の放送だけではなく、データ放送とも連動している。放送中には、数多くの意見が寄せられるが、画面の一部では、どうしても紹

図3 文字情報の画面イメージ

図4 データ放送画面

介しきれないものが出てくる。Twitterを通じて寄せられた意見は、データ放送ではほぼ漏れなく紹介できた。また、データ放送画面にはTwitterを意識し、それを連想させるような画面を作成して好評を得ることができた（図4）。

送出するメディアが多くなると、規模が大きくなり、統一性も取れなくなる恐れがあるため、内容を扱う部分は1カ所に集約し、同じ情報を各メディアの適性に応じて利用するという方法をとった。これにより、少ない人数での運営を可能にすることができた。

文字情報はネット扱いとしてオンエ

ア画面に乗せてネットをしたが、JNN各局では、自局エリアのより細かい情報を付け加えられるように、各局でマスクをして独自情報を出す仕組みを設けた。このため、映像信号だけではなくデータを、各局に配信する仕組みをとることにした（図5）。

放送当日の文字情報は、入力担当・校正担当・データ放送担当など総勢約15名のスタッフで行い、その多くのスタッフが、情報の入力・選別に携わった。

投稿された内容の採用基準は、放送に不適切な内容を弾くとともに、内容が偏らないように選択しなければなら

図5 文字情報システム構成概念図

ず、なかなか大変な作業となった。Twitterに関しては利用規約上、内容を改編することができないが、明らかに誤字である場合は訂正をすることにした(候補者の名前の文字を間違ってしまう方が多い)。9時間にも及ぶ長期戦で、地上波の放送で利用した文字情報の数は2,139件、データ放送で送出したTweetは2,429個となった。各担当者が势力的に作業をした結果、かなり重厚なコンテンツにすることができた。

む す び

今回の選挙は、民主党への逆風により、自民党の歴史的な大勝に終わった。第3極(維新の会など)の躍進や、大臣経験者の苦戦、数多くの現役閣僚の落選、多くのニューフェイス議員の誕生、

いろいろ大きな出来事があった。選挙の開票結果は、翌朝になれば、大勢が判明してしまうが、日本が大きく動く瞬間の状況を、逐一お茶の間へ届けることは社会的使命であると言える。

日本全国で発生する一大変化を伝えるためには、大規模な体制を引く必要があり、TBSテレビ/JNN各局が制作する番組の中でも、トップクラスの規模となる。コストダウンが叫ばれる中、既存のファシリティを活用しながら対応するのは、非常に大きな挑戦であったが、大きな事故もなく大変有意義な番組制作ができたと思う。

次の選挙は、2013年夏に参議院選挙が行われる。今回の経験を基に、より良い番組作りに邁進して行きたいと思う。

(2013年1月10日受付)

村上 信高

1994年、(株)東京放送(現(株)TBS HD)入社。入社当時は、回線設備(含FPU受信基地局やSNGシステム)の運用や保守に携わる。2004年、ラジオ技術に異動し、スタジオTDや野球をはじめ、さまざまな中継TD業務および無線設備・ラジオマスタ設備の運用や保守に携わる。その後、2011年報道・中継技術部、2012年、報道技術部へ異動し、ニュース中継業務に携わる。今回、初めて選挙中継TPを担当。

安田 英史

1999年、(株)東京放送(現(株)TBS HD)入社。入社当時は、BSや地上デジタル放送のシステム構築やワンセグの立ち上げなどに携わる。2008年～2009年、南カリフォルニア大学へ留学、アニメーションや双方向メディアの研究を行う。帰国後は、技術局CG部や報道技術部に所属し、CG関連システム全般を担当。2010年より、選挙システムCGを担当し、現在に至る。